

佳作

十数年後のぼくへのメッセージ

福岡県 北九州市立足立小学校三年 小田 孝太朗

「またか。」

とぼくは思わず大きな声で言ってしまったので、先生からしかられました。なぜそう言ったかというところ、毎年七夕や学年末になると、将来の夢について書くことになるからです。ぼくはまだ三年生です。毎年何になりたいかはかわっているのですが、今年も七夕の短ざく書きにまよってえん筆が止まっていたら、急いで書くように言われたので、あわててとなりのお友達をまねして、ゲームクリエイターになりたいと書いてしまいました。

次の日、そのことを知ったお母さんから、「ゲームクリエイターって何をする仕事か知ってるの。この前まで、日本一の大工になるって言ったのに。」

と言われ、まねして短ざくに書いたことがばれてし

まいました。ぼくは、すぐお母さんに、

「だってユーチューバーとか、ゲームクリエイターの方が、かっこよく思われるやん。」

と言いつ返しました。するとお母さんから、

「実はあと十数年すると、もっと自動化が進んで、今存在していない仕事がたくさんとふえて、今存在する仕事は半分に減るのよ。」

という話を聞き、ぼくはびっくりしました。

ところで、そんなぼくのお母さんは、学校の先生をしています。自分では、やさしい先生と言っています。毎日ノートなどがたくさん入った大きな袋を持って帰ります。ぼくが、二年前から、水泳の選手コースに入ったので、お母さんは毎日、えいようのことを考えた食事を時間をかけて作っています。食事が終わると片づけて、お風呂に入って、ぼくと同じ時間にねます。いそがしいと言いつながら、よくねるなと思いつていました。でもこの前、朝五時に目がさめて、となりの部屋の電気がついていたので行ってみると、お母さんがクラスみんなの日記に、返事を書いていました。二、三行しか書いていない日記にも、お母さんは、ニコニコしながらぎっしり返事を書いていました。ぼくはまたすぐねたけど、そ

の日お父さんに聞くと、毎朝早くおきて、ぼくのために早く帰って出来なかった仕事をしたり、朝ごはんは必ずパワーの出るみそ汁をつくってくれたりしているということを初めて知りました。そういえばお母さんがこの前、

「たとえ自動化が進んでも、お母さんの仕事は人が育てているものだと思うし、忙しいけど、孝太郎のような子どもたちのかのうせいを応えんずることが大好き。」

と言っていました。ぼくに、先生になってほしいから言ったのではなく、自分の仕事が大好きだからこそ言っているように感じました。

ぼくは、そんなお母さんが自まんです。あと十数年後、ぼくはどんな仕事をしているんでしょう。でも今回一つ思ったことは、心から自信をもって好きといえる仕事についていたいということです。十数年後のぼく、自信をもって好きな仕事に打ちこんでいるよね。